

夫婦パスタ日記

第5話『エビとナスのアラビータ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

立花 圭吾（33） 印刷会社『京町印刷』営業部社員
立花 かおり（34） 圭吾の妻、印刷会社『京町印刷』総務部社員

長沢 聡志（30） グラフィックデザイナー
寺川 千晴（25） スーパー『ユーミー』レジ担当
大浦 早苗（57） （声）かおりの母、大阪在住

かおりの後輩社員
印刷会社『京町印刷』の社員たち

1 街を走る営業車

2 その車の中

運転をしている圭吾。

圭吾（N） 「俺が商科大学を卒業して、地元
の大手印刷会社『株式会社京町印刷』に入
社したのは、今からちょうど十年前の話だ。

3 印刷会社『（株）京町印刷』・全景

圭吾（N） 「『株式会社京町印刷』は、戦後
まもなく地元で最初に活版印刷事業を始め
た老舗企業で、現社長が四代目、その父で
ある三代目社長が会長の職に就いている」

4 同・各部署のカットバック

営業部、総務部、制作部など。

圭吾（N） 「時代と共に地域で成長してきた
企業で、地元の企業や商店のチラシやパン
フレットといった広告制作物の受注を行い、
印刷業とは謳っているものの、時代のニ―

ズに合わせようと十五年前からはWEB制作部門を立ち上げ、ホームページや通販サイトの制作受注という事業展開も始めた。それに伴い、『制作部』は紙媒体やロゴマークなど従来の制作全般を担っていた『制作一課』と、WEB制作を担当する『制作二課』と、新たに部署を分けた形になった」

5 同・駐車場

駐車した営業車から降りてくる圭吾――手にはコンビニの袋を持っている。

圭吾（N）「部署が分かれているのは俺の所属先である『営業部』も同様に、企業や学校をクライアントにする『営業一課』と、行政や個人商店などをクライアントにする『営業二課』となっており、俺は入社して最初の三年は営業二課、それ以降は営業一課で、入社以来営業畑を歩いている」

タイトル——夫婦パスタ日記

第5 話『エビとナスのアラビアータ』

6 印刷会社『（株）京町印刷』・食堂

社員たちが、それぞれ昼ご飯を食べている——その中に圭吾の姿もある。

圭吾は、カップ麺を食べている。

と、背後から女性の声がする。

女性の声「何だ、圭吾君」

と、圭吾が振り向く——妻・かおり

（34）が、コンビニの袋を持ってやってくる。

圭吾「おお、かおりちゃん」

かおり「今日はいたんだね。いただきます」

と、袋からサンドウィッチを取り出して、食べ始める。

圭吾「ああ。本当は今日、一時から長沢さんと次回のチラシの打ち合わせする予定だったんだけどさ、急遽別の打ち合わせが入っちゃってさ」

かおり「それで、長沢さんは？」

圭吾「昨日電話して、三時からに変更しても
らったよ」

かおり「急な予定変更はやめてほしいよね」

圭吾「（苦笑して）まあな」

圭吾（N）「俺がかおりちゃんと最初に出会ったのは、入社一年目の社員旅行の時だった。当時から総務部会計課に所属していたかおりちゃんは入社二年目で、俺の一つ上の先輩社員だった。営業部と総務部ではあまり一緒に仕事をすることもなかったが、講堂で偶然出くわすことが数多くあり、また帰り道が途中まで同じで一緒に帰ることもあったことから、自然と親交が深まっていた」

7 圭吾とかおりの結婚式の写真

圭吾（N）「そして五年前に結婚をし、今は会社から電車で十五分ほどのアパートで暮らしている。俺たちは今、どうやら社内で

有名な『おしどり夫婦』と言われているらしい」

8 印刷会社『（株）京町印刷』・食堂

かおり「今日、何時ぐらいに帰れそう？」

圭吾「多分定時だと思う。何かあった？」

かおり「うん……。ちよっと、相談したいところだ」

黙ってしまふ圭吾。

9 同・総務部

昼食を終えたかおりが戻ってくると、自分のデスクに座る――机回りは綺麗に整頓され、メモの付箋が何枚もパソコンに貼られている。

かおり、黒縁のPCメガネをかけ、パソコンで事務仕事をするが、ふと手が止まり、険しい顔になる。

10 アパート・立花家・居間（回想）

T『数日前』

かおりがスマホで電話している。

かおり「せやから、それは何べんも言うたやろ」

と、スマホから母・大浦早苗（57）の
声がする。

早苗の声「もうあんたらも結婚して五年やろ。余計なことや言うのは分かつとんねんけど、やっぱりお父ちゃんもお母ちゃんも、早う孫の顔が見たいんやわ」

かおり「分かつとるわ。けどなあ、これは私一人でどうにかなることやないやろ。圭吾君とも相談してみんことには」

早苗の声「せやったら、お母ちゃんから圭吾さんに話、したろうか？」

かおり「そんなみつともないことせんといて」
早苗の声「何がみつともないんや。あんたが言えへんねやったら、お母ちゃんが言うた
るわ。これは夫婦だけやない、家族、いや
親戚全体の話やねんから」

かおり「分かった……。近いうちに、圭吾君とちゃんと話すから」

早苗の声「近いうちに言うて、ずっと先延ばしにしたらアカンで。こういうのは、タイミングが大事やねんから」

かおり「せやから、分かった言うてるやろ。圭吾君には私から言うから、母さん、絶対に余計なことせんといてや」

早苗の声「何が余計なことなんや。圭吾君のご両親かて、私と同じようなこと考えてるんとちやうやろか。子どもが結婚したんやから、孫の誕生を期待するのは、なーんもおかしいことあらへんやろ」

かおり「そうかもしれへんけど……」

早苗の声「子育てのことは、心配あらへんで。何なら私が手伝いに行ってもええんやから」
かおり「そういう問題じゃなくてさ……」

早苗の声「ああ、仕事戻らなあかんわ。ほな、また連絡するわ（と電話を切る）」

呆れ顔のかおり。

11 印刷会社『京町印刷』・総務部

かおりが、事務仕事をしている。

かおり（N）「私は大阪で生まれ育ち、大学進学を機に上京したが、就職先が『京町印刷』になったので地元には帰らなかった。母親がせっかちだということは、小さい頃から分かっていた。反面教師とまでは言わないが、私は母のようにはならないと常日頃から心がけている。それでも血は争えないのか、勤務中、各部署から残業申請や交通費申請などのタイミングが一日でも遅れたり、訂正が一向に戻ってこない場合は、内線電話で該当社員に連絡をして急かすこともある」

と、隣に座っていた後輩の男性社員が、
それへ、

後輩「立花先輩、何かエラーが出ちゃうんですけど」

かおり「どれ、見せてごらん」

と、後輩のパソコンの操作をする。

かおり「ああ。ほら、関数の中に変な記号が混ざってる」

後輩「あ、ホントだ……」

かおり「きつとキーボード操作してる時、間違えて打ちやったんでしょ。私もよくあることだから」

後輩「ありがとうございます」

かおり、再びデスクに戻ると、パソコン操作を行う。

かおり（N）「圭吾君と結婚して五年。お互い仕事を優先して今に至るけど、確かに母の言う通り、子どものことも考えなければいけない頃になっている。特に女性の場合は高齢出産になるリスクを伴うので、これもせっかちにはしたくないが、時間の問題だ。大阪に残った地元の同級生や、上京後に知り合った大学の同級生には、既に出産を経験し、中には三回も四回も出産経験した者もいる。三十四歳という適齢期を迎え、

様々なことに向き合わなければいけない時期になっていた。子どもが欲しいという気持ちにはあったが、夫や仕事など、自分一人だけでは解決できる問題ではなかった。私にとってこの話は、仕事以上に、気の重たい事案だった」

12 同・ミーティングルーム

掛け時計が午後三時を示している。

圭吾に伴われて、聡志が入ってくる。

圭吾「すいませんでした、時間変更してもらって」

聡志「いえいえ、大丈夫です」

圭吾「では早速、次回のチラシについてお話を」

聡志「はい」

× × ×

圭吾と聡志が、資料を見ながら打ち合わせをしている。

圭吾（N）「営業担当である俺が、スーパー

マーケット『ユーミー』の担当者からチラシに掲載する商品をヒアリングし、それをチラシ制作をしてきている長沢さんに伝えるのが、普段の流れだった」

聡志「今回は、結構安売りする商品が少ないんですね」

圭吾「この辺りでも、最近いろんなチェーン店のスーパーがオープンしたでしょ。競合他社との差別化を図りたいし、たくさん集客したい気持ちはあるらしいんですが、物価高騰でなかなか、あれもこれも安売りはできないみたいで」

聡志「分かります。僕もいろんなスーパーのチラシ見て買い物しますが、同じ商品でも違うお店で一円でも安いものがあったら、スーパーをハシゴしてでもそっち行っちゃいますから」

圭吾「長沢さんが家事やってるんですもんね。奥さんが外で勤めていらっしゃるから」

聡志「ええ。専業主夫みたいなもんですよ。」

でも、それで夫婦仲が上手く行くなら、それも良いかなって」

圭吾「……」

×

×

×

〈フラッシュ〉

『京町印刷』食堂でのかおり。

かおり「うん……。ちよっと、相談したいところだ」

×

×

×

圭吾「……あの、長沢さん」

聡志「はい？」

圭吾「奥さんから、相談があるって言われたら、何を連想します？」

聡志「え？」

圭吾「いや……。さっき奥さんから、今晚相談したいことがあるって言われたので」

聡志「まあ夫婦のお話ですから、僕が何か言う資格はありませんし、変に立花さんの不安を煽ってしまうのもいけないと思いますからね……」

圭吾「うーん……」

聡志「そんなに難しく捉えなくても良いんじゃないですかね。なーんだそんなことか、みたいなことかもしれませんし」

圭吾「そうですよねえ」

聡志、何かを思いついたように、手を叩くと、

聡志「あッ……。湿っぽい空気にしたくないんだったら、何か気合いを入れたご飯を食べながら話すのは、どうですか？」

圭吾「気合いを入れるご飯ですか？」

聡志「例えば、辛いものとか」

圭吾「辛いもの？」

聡志「といっても、僕が今頭の中で、パツと思いついたのは、いつもの通りパスタなんですよけどね」

圭吾「よく作ってるんですもんね、パスタ」

聡志「ええ」

圭吾「何か、パスタで辛いものってあります？」

聡志「アラビアータとか、どうですか？」

圭吾「アラビアータ？」

聡志「まあ簡単に言うと、辛いトマトソースベースの Pasta ですね。唐辛子を効かせるのが、よくあります」

圭吾「なるほど。具材って、どんなのがあるんですか？」

聡志「トマトソースと合いそうな具材だったら、問題ないですよ。ツナとかベーコンもありますし、シーフードを使ったり。うちはいつも、エビとナスを使っています」

圭吾「エビとナスのアラビアータか……」

聡志「トマトベースのものって、結構ナスが合うんですね。そういえば、最近『ユミ』で安売りしてないな」

圭吾「まあ、野菜はどうしても高くなりますからね」

聡志「（苦笑して）ああ、すいません。また世間話になってしまつて」

圭吾「いえいえ。こつちが料理の相談なんて

したものですから。エビとナスのアラビア
ータ、一度レシピ調べてみます」

聡志「後で簡単なレシピ、メールでお送りし
ておきましょうか？」

圭吾「良いんですか？」

聡志「ええ。結構簡単ですよ。まあ、最低限、
エビとナスは揃えなきゃいけないですけど、
調味料とかは特に難しいものは使ってませ
んから、立花さんでも作れますよ」

圭吾「大学時代から自炊してたので、最低限
の料理は作れると思います」

聡志「じゃあ大丈夫です。問題なく作れます。
家に戻ったら、すぐメールしますね」

圭吾「ありがとうございます。助かります」

13 同・営業部

打ち合わせを終えた圭吾が戻ってくる
——自分のデスクに座ると、スマホを
取り出して、かおりにメッセージを送
る。

圭吾のメッセージ&声「今日の晩御飯、アラ
ビアータ作ります！」

と、かおりから返信が来る。

かおりのメッセージ&声「はーい」

圭吾「……」

14 同・全景（夕）

15 同・営業部

圭吾がパソコンで仕事をしている――
パソコンにメールの受信通知が届く。

圭吾、気づいて、メールを開く――聡

志からのメールが届いている。

聡志のメール&声「立花様 いつもお世話にな
っております。本日の打ち合わせもあり
がとうございました。本日話題に出ていた
アラビアータのレシピについて、以下の通
り簡単ではございますが、二人分の材料と
レシピをお送りします。ご参考になれば幸
いです。よろしく願いいたします。長沢」

圭吾「（呟いて）ありがとうございます」

と、画面をスクロールさせると、材料とレシピが書かれている文章になる――圭吾、スマホで該当部分を撮影する。

16 同・表

かおりが待っている――そこへ、圭吾がやってくる、

圭吾「おまたせ」

かおり「どうしたの？ いきなりアラビアータ作るなんて」

圭吾「いや……たまたまね、今日長沢さんの打ち合わせでパスタの話が出てね、それでエビとナスのアラビアータ作ろうと思ってる」

かおり「へえ。エビの料理なんて、うちじゃほとんど作らないから、たまには良いかもね」

圭吾「じゃあ、途中で『ユーミー』寄ってくか」

かおり「あ、ついでに洗剤買ってこ」

17 スーパーマーケット『ユーミー』・全景
(夕)

18 同・店内

買い物カートを引いているかおりと、
一緒に歩いている圭吾——カゴには、
ホールトマト缶と、ナスの袋が入って
いる。

鮮魚コーナーの前を通ると、

圭吾「(スマホを見ながら) えっとね、エビ
はね、バナメイエビを長沢さんは使ってる
らしい」

かおり、パックに入ったバナメイエビ
を見つけて、

かおり「あ、これじゃない」

圭吾「(エビの数を数えて) よし、これなら
足りる」

× × ×

千晴が、圭吾とかおりのカゴの商品を、
次々にバーコードスキャンしていく。

千晴「ポイントカードお持ちですか？」

かおり「あ、私持つてる（と財布からポイントカードを取り出す）」

千晴、ポイントカードをバーコードリーダーでスキャンする。

千晴「カードお返しします。七番のレジにどうぞ」

× × ×

購入した商品を、エコバッグの中に入れて
いるかおり——会計機で精算をし
ている圭吾。

19 アパート・全景（夜）

20 同・立花家・居間

台所で準備をしている圭吾——風呂場
からかおりが出てくると、

かおり「今お風呂沸かした。何か手伝おう

か？」

圭吾「大丈夫。何とかやってみるわ。長沢さんが、分かりやすいレシピ送ってくれたから」

と、スマホを見る。

以下、調理工程をカットバックで——
レシピの文章を読む聡志の声が同時に
流れる。

圭吾、スマホで撮影したレシピを見ながら、調理を進めていく。

聡志の声「材料（二人分）　パスタ：二百グラム　水（茹でる用）：二リットル　塩（茹でる用）：小さじ四　エビ（僕はバナメイエビを使っています）：十尾　ナス：一本　ホールトマトの缶：一缶　オリーブオイル：大さじ二　にんにく：二片　鷹の爪（わが家は既に輪切りになったものを使っています）：少々　コンソメの素：小さじ一　トマトケチャップ：大さじ四　パセリ：適量」

圭吾「さて、作るか」

× × ×

圭吾、バナメイエビの殻をむいて、包丁を使って背綿を取り除く。

聡志のメール&声「エビは殻を剥いて尻尾を取り、背に切れ目を入れて背綿を取り出す」

× × ×

圭吾、ナスを切る。

聡志のメール&声声「ナスは縦半分になり、乱切りにする」

× × ×

圭吾、ニンニクを薄切りにする。

聡志のメール&声「にんにくは薄切りにする」

× × ×

圭吾、鍋の水と塩を入れて、火にかける。

× × ×

鍋の水が沸騰している——圭吾、パスタを鍋に入れる。

聡志のメール&声「鍋に水と塩を入れて、沸

騰したらパスタを入れて規定の時間通り茹でる（わが家のパスタ麺は七分です。その間に材料の調理をします）」

× × ×

圭吾、フライパンにオリーブオイル、ニンニク、鷹の爪、切ったナスを入れて炒める。

聡志のメール&声「フライパンにオリーブオイル、にんにく、鷹の爪、ナスを入れて、ナスに火が通るまで中々強火で炒める（※にんにくが焦げないように注意）」

× × ×

フライパンの中のナスに火が通っている——圭吾、エビを追加する。

聡志のメール&声「ナスの色が変わったら、エビを入れて火が通るまで（約一分半）炒める」

× × ×

圭吾、フライパンの中にホールトマトとコンソメの素を入れる。

聡志のメール&声「ホールトマト缶とコンソメの素を入れて、全体を煮詰める（※トマトは、ゴムベラ等で潰す）」

× × ×

鍋の中で茹で上がっているパスター——
圭吾、トングでパスタをフライパンの
中に入れ、トマトケチャップを加える。

聡志のメール&声「（このタイミングでパスタが茹で上がる頃です）湯切りしたパスタをフライパンに入れて、弱火にしたら、麺に絡むように全体を混ぜ合わせ、最後にトマトケチャップも加えて全体を和える」

× × ×

ソファーに座っているかおりが、深刻
そうに圭吾を見ている。

× × ×

圭吾、そのかおりの様子に気づかず、
完成したパスタを、皿に盛り付け、パ
セリを振りかける。

聡志のメール&声「皿に盛り付けて、上から

パセリを振りかける」

圭吾「よし、できた」

21 完成した『エビとナスのアラビアータ』

22 アパート・立花家・居間

圭吾、パスタの皿をテーブルに運ぶ。

圭吾「よし、できたよ」

ソファーに座っていたかおり、テーブルまでやってきて、

かおり「美味しそうだね」

圭吾「レシピ通りには、多分できたと思う。

食べよう」

かおり「うん」

向かい合うように座る圭吾とかおり。

圭吾・かおり「いただきます」

と、それぞれ食べ始める。

かおり「辛いね、結構」

圭吾「アラビアータっていうのは、辛いトマトソースのことなんだよ。長沢さんが教え

てくれたんだよ。レシピには、鷹の爪は
少々って書いてあったけど、ちよつと入れ
すぎちゃったかな」

かおり「そつか……」

と、食べていたフォークを置く――圭
吾、察するがパスタを食べ続ける。

圭吾（M）「フォークを置いた……。え、か
おりちゃん、何話し出すんだ？」

かおり「あのね……」

圭吾「……」

かおり「相談っていうのは、子どものことな
んだ……」

圭吾、かおりを見つめたまま、フォ
ークでパスタを巻き続けている。

かおり「この間、大阪の母さんから電話があ
ってね。いろいろ急かしてくるんだよ。孫
の顔が見たいって」

圭吾「……」

かおり「でもさ、そんな簡単な話じゃないじ
ゃん。私だってさ、子育てしたいなってい

う願望はあるよ。でも、今の仕事だって続けたい」

圭吾「……」

かおり「だから、そういう、これからのことを、圭吾君と相談したいなって思ってたの」

圭吾「そっか……、そういう話だったんだ」

かおり「圭吾君は、どう思ってる？ 子ども欲しい？」

圭吾「そりゃ欲しいよ。でも、かおりちゃんが仕事を優先したいって思うんだったら、無理に急ぐ必要はないと思う。もちろん、お義母さんが孫の顔をみたいって仰る気持ちだって分かるし、多分俺の親父やおふくろだって、口には出さないだけで、同じようなこと思ってるんじゃないかな」

かおり「男の人は余裕があるかもしれないけど、出産する側としてはタイムリミットとは言わないけど、年齢が上になればなるほどリスクだってあるからさ」

圭吾「そうだよね」

かおり「……」

圭吾「かおりちゃんは、これからどうしたい？」

かおり「何よりの不安は、子育てと仕事の両立ができるかどうかってこと」

圭吾「……」

かおり「やってみなきゃ分かんないけどさ、自分にそれができるんだろうかって」

圭吾「出産はかおりちゃんだけど、子育ては当然俺だってやるよ。生まれてくる子どもは、俺たち二人の子どもなんだから」

圭吾（N）「慎重に言葉を選んでもつもりだった。それでも、かおりちゃん表情は、やっぱり暗い」

圭吾、パスタをようやく口にする。

圭吾「パスタ、冷めちゃった」

かおり「ああ、ごめん。せっかく作ってくれたのに。あつため直すね」

と、二枚の皿を台所に運び、まずは一枚電子レンジの中に入れて温める。

かおり、レンジの前に突っ立っている――圭吾、そんなかおりの後ろ姿を見つめている。

考え事をしているように、険しい顔のかおり。

レンジの音が鳴り、中から皿を出すと、もう一枚の皿を温め始める。

二人の間に会話はなく、長い沈黙が流れている。

レンジの音が鳴り、中から皿を出すと、二枚の皿をテーブルに運ぶかおり。

かおり「これぐらいだったら、良いでしょう」

圭吾「(皿を触って) うん、ありがとう」

かおり、重々しく座る。

圭吾「まずは、食べよう。話は、それからじつくりしよう」

かおり「圭吾君……。 (と作り笑いを浮かべて) そうだね」

パスタを食べ始める圭吾とかおり。

圭吾「あのさ……かおりちゃん」

かおり「何？」

圭吾「この言葉が適切かどうか分からないけど、やらずに後悔するぐらいなら、やってみるほうが良いんじゃないかな……」

かおり「圭吾君……」

圭吾「もし、五年先にさ、やっぱりあの時子ども作っておけば良かったって思うぐらいだったら、今の方が良いでしょ」

かおり「……」

圭吾、目を反らして、下を向く。

かおり「そうだよね……」

圭吾、顔を見上げる。

かおり「圭吾君の言う通り、後で後悔するぐらいなら、今だよね（と微笑む）」

圭吾「かおりちゃん……」

かおり「何か、ようやく気持ちの整理がついた気がする。母さんに言われた時は、正直イラッとしたし、圭吾君に相談して変に思われたらどうしようかなと思って、ここしばらくずっと考えちゃってた」

圭吾「そっか……。けどさ、一人で抱え込まないでよ。これは、俺たち夫婦の問題なんだからさ」

かおり「うん……。…」

圭吾「（苦笑して）どんな相談かと思って、気合い入れるためにアラビータ作ったけど、あんまり意味なかったね」

かおり「そんなことないよ。パスタも美味しかったし、圭吾君なら私の話、ちゃんと受け止めてくれるって思ってたから」

圭吾「かおりちゃん……。…」

かおり「私、頑張る」

圭吾「俺も」

微笑み合う圭吾とかおり。

つづく